

つるみの風

つるみの風 第47号
2022年4月9日発行
鶴見聖契キリスト教会
〒230-0074 横浜市
鶴見区北寺尾 1-16-7
TEL 045-572-0857

死と絶望のただ中から

春爛漫、いい響きのことばです。この紙面が皆さんのお手元に届く頃、桜もすでに散っているでしょう。春はまた別れと出会いの季節。一期一会はいつか幕を閉じ、形あるものは壊れ、咲き誇った花もやがて散る。そこにもものあわれや風情を感じるのはステキですが、一抹の寂しさを覚えるのもまた自然なこと。「満開の桜や 色づく山の紅葉を この先いつた何度 見ることになるだろう」(竹内まりや『人生の扉』歌詞より)。自分は何度かなと考えます。

コロナ禍の暗雲をどうにか耐え忍んで二年が経過し、少しは雲が薄くなって日が差してきたかな、と思っていたら、二月も終わりに近づいたあの日、突如黒雲が西の地平線から湧き上がり、あつという間に世界を覆ってしまいました。桜散る寂しさとは次元の違う、胸が苦しくなるような絶望感に襲われます。皆さんもおそらく同じでしょう。以来、耳の底にはソフィア・ローレン主演の映画『ひまわり』、ヘンリー・マンシーニ作曲の哀愁を帯びたサントラが流れています。果てしなく広がるひまわり畑はウクライナがロケ地とか。



時は復活祭、イースターです。今年四月十七日(日)がその日。「復活」というポジティブなことばを足掛かりに、目を上げ、上を向いて歩きたい。涙がこぼれないように、ですが……

●教会のシンボルは十字架？

教会のシンボルは何か、と問われるなら、おそらく十人が十人とも「十字架」と答えるでしょう。紀元二六／二七年、ガラヤのナザレ出身のイエスが約三十歳の頃、人々の前に公の活動を開始し、時のローマ帝国にまさる神の新しい支配を告げ知らせ、ご自分を王・救い主として信じて従うよう招くも、時のユダヤ宗教指導者らの妬みと恨みを買ひ、ついには十二弟子のユダに裏切られてローマ側に引き渡され、紀元三〇年、罪なきイエスは十字架刑に処せられた。実はそれが神に逆らい続けて来た人類の罪を背負う身代わりの死であった。

だからおぞましき処刑用具の十字架が、今や人類の救いのシンボルとなったという訳です。教会の屋根のてっぺんや外壁、礼拝堂内の正面にも十字架はありますし、十字架なくしてキリスト教は始まらないと言ってもいいでしょう。小物やアクセサリーとしても十字架は人気がありますね。では、イースターとして世界中で祝われる復活祭はなぜあるのか。そして、復活祭のシンボルがあるとすればそれは何でしょうか。

●初代教会の使徒たちは

金曜日に十字架で死んだイエスは、日没前に墓へ葬られ、足掛け三日後の日曜日朝、墓からよみがえられました。復活です。その後四十日間、イエスは弟子たちの前に復活した姿を顕わし、天に引き上げられました。昇天です。その十日後の五旬節、エルサレムにいた十二弟子を含むイエスの弟子たちに天から聖霊が降り、生まれ変わった弟子たちは「イエスは救い主、王の王主の主」と語り始めました。

ところで、十二弟子の筆頭格ペテロが、聖霊の降ったその日に祭りが集まっていたエルサレムのユダヤ人たちへ語った説教の記録にはこうあります。「神が定めた計画と神の予知によつて引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によつて十字架につけて殺したのです。しかし神は、イエスを死の苦しみから解放して、よみがえらせました。この方が死にながれていくことなど、あり得なかつたからです。……このイエスを、神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです」(新約聖書・使徒の働き二・二三、二四、三二、三三)。

る事実だ、それはイエスが復活して全世界の王の王、主の主となられたからだとの証言があるのみです。あの衝動的で浮き沈みの激しいペテロが、全く別人のように堂々と力強く語る姿は、ペテロ復活とでも言いたくなる光景だったでしょう。彼らが目撃したイエスの復活、復活したイエスのリアリティが、自らの新しい出発、生まれ変わりと直結しているのです。イエスの復活を疑う者は私を見よ、これこそが証拠だといふので



●カリーエ博物館のフレスコ画

トルコのイスタンブール郊外にあるコーラ修道院、現在のカリーエ博物館の聖堂内天井に、「復活」(アナスタシス)と呼ばれる有名なフレスコ画が描かれています。トルコ旅行をする人にガイドブックを貸したら、おみやげにその絵を買ってきてくれました。十字架死の後、陰府(よみ)に下ったイエスが、死の世界から人類の始祖アダムとエバを引き出して、いる光景で、ビザンティン美術の傑作と評されます。

墓から引っぱり出されるアダムとエバの背後には旧約聖書の聖徒たちが控えています。イエスの右手はアダムの左手首を掴み、左手はエバの右手首を掴む。つまり、死に勝利したイエスが死に捕らわれている人類を、本人たちの握力に期待せずその手首を掴み、いわば力づくで死から解放しているのです。ふつう、イエスの復活はイエスが墓からよみがえった

日曜日の朝と考えますが、この絵を描いた東方正教会の神学によれば、イエスの復活は墓に葬られている三日間、その死のただ中ですでに起こっている、死後の復活ではなく陰府に下った死の真つ只中において、死の支配を打ち破った勝利として始まっているといふのです。



●キリスト復活の神秘と奥義

私たちの罪の身代わりイエスが十字架で死んでくださったことを信じなさいと言われれば、自分の不甲斐なさを嘆く私たちはまだ応答しやすいでしょう。でも、イエスは三日目に肉体をもって復活したことを信じなさいと迫られると、そんな科学的にあり得ないことをどうして、とか、今の私の現実と何の関係があるのか、と抵抗を感じます。でも聖書はこう語って止みません。「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたこと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」(ローマ人への手紙一〇・九〜一〇)。イ

エスの復活は、私が死後にやがて復活する先駆けであるばかりか、今の混沌とした世界が回復し、新しく創造される鍵であると聖書は教えます。死と絶望、破壊と無秩序を打ち破るのが、あの二千年前のイエスの復活であり、イエスが世界の王として君臨したのだ、と。

●世界は復活に望みを賭ける

だから私たちは、今この世界にあつて復活に望みを賭けます。たとえコロナ禍や戦争、プライヴェートな悩みがどれほど深くとも、イエスは死からよみがえられ、全世界は新しい創造を約束されたからです。

最初の問いに戻しましょう。復活祭のシンボルは何でしょうか。いのちのよみがえりを記念するイースターエッグでしょうか。それも素晴らしいのですが、復活のシンボルは「生きていることを喜んでる私自身」としましょう。イエスはよみがえられた。だからこの世界はやがてよみがえれる。そして私の人生も復活する。ただしイエスにあつて、です。なぜならイエスコそ王の王、主の主であり、死と絶望の底から、あのアナスタシスのフレスコ画のように、手をつかんでぐいと引き上げてくださるお方だからです。「王の王、主の主」、これはヘンデルのメサイアにあるハレルヤ・コーラスの一節。だからあの曲はイースターにふさわしいのですね。

